

北パイワン語の接頭辞 ki- について

大谷青渚

京都大学大学院

キーワード：パイワン語、オーストロネシア語族、接頭辞

1. はじめに

本稿では、北パイワン語の接頭辞 ki- について考察する。先行研究（小川・浅井 1935, Ferrell 1982, Chang 2006, Huang 2012）で共通していた ki- の機能は以下の (1) に見る 2 つであった。

(1) 先行研究で共通している ki- の機能

- a. 名詞語根について「獲得」の意味をあらわす

ki- + vasa 「芋」 → ki-vasa 「芋ほり」 (小川・浅井 1935: 133)

ki- + paisu ‘money’ → ki-paisu ‘get or seek money’ (Ferrell 1982: 119)

- b. 動詞語根について「再帰」の意味をあらわす

ki- + kəɫəm ‘to hit’ → ki-kəɫəm ‘to hit oneself’ (Chang 2006: 221)

ki- + paiz ‘to fan’ → ki-paiz ‘to fan oneself’ (Huang 2012: 189)

このように、ki- は語根について様々な意味を派生する機能を持つ。本稿では、筆者のデータにある ki- の機能を整理してまとめた結果、これらの機能のほかに「遊び」の意味を持つ語の派生や「依頼」の意味を持つ語を派生する機能を持つことを指摘する。

本稿は 2 節でパイワン語の話されている地域や音素目録、接頭辞一般についての説明など本論文にかかわる基礎的事実を述べる。3 節では ki- の機能についての共時的、通時的な先行研究を紹介する。4 節では筆者のデータを提示しながら、筆者の提案する新たな ki- の機能について論じる。5 節は本稿のまとめである。

2. パイワン語の基礎的事実

パイワン語はオーストロネシア語族に属する言語で、台湾南部の屏東県、台東県で話されている台湾原住民の言語である。パイワン語は地域によってそれぞれ北パ

イワン (N)、南パイワン (S)、中パイワン (C)、東パイワン (E) と呼ばれる (Ferrell 1982: 4)。これらの地域の方言差は語彙面で少々、音声面で顕著ではあるが、相互理解が不可能なほどではない (小川・浅井 1935: 131)。

本稿で扱うデータは三地門郷口社村出身の調査協力者から得たものである。

パイワン族の人口は原住民族委員会のホームページ¹によると 86,000 人ほどいるが、40 代以下の人々はほぼパイワン語を話すことができないため、話者数はそれよりも少ないと思われる。

本稿で提示するパイワン語のデータは、断りが無い限り筆者が調査で得たデータである。それ以外のものに関しては適宜引用元を示す。その際、先行研究ごとにパイワン語の話されている地域が異なるため (2) のように北、南、中、東のどの地域のパイワン語であるかを示す。

(2) それぞれの先行研究で対象としているパイワン語

1. 小川・浅井 (1935) 南パイワン語 (S)
2. Ferrell (1982) 中パイワン語 (C)
3. Chang (2006) 北パイワン語 (N)
4. Huang (2012) 中パイワン語 (C)

本文中では (N: Chang 2006: 74) のように表記し、これは「北パイワン語を扱う Chang (2006) からの引用」ということをあらわす。

2.1 音素目録

パイワン語は 4 つの母音と 21 の子音を持つ。

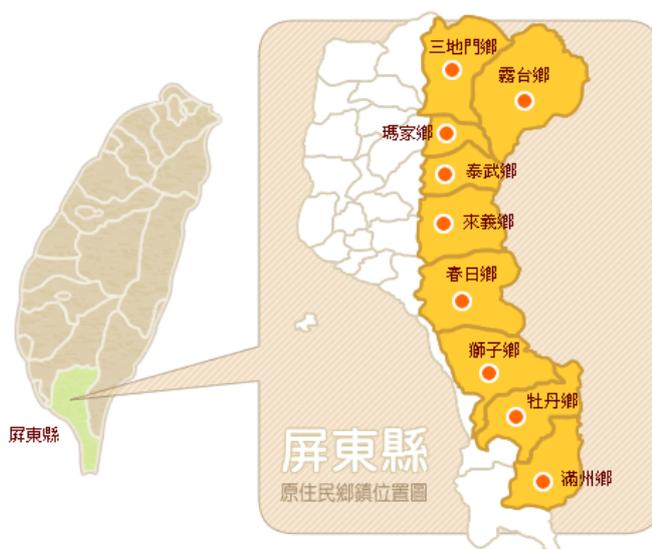


図 1: 屏東県のパイワン族の分布

¹原住民族委員会ホームページ <https://www.apc.gov.tw/portal/index.html>. (2019 年 4 月 12 日閲覧)

図 1 の屏東県の地図もホームページより。

表 1: パイワン語の母音音素

	Front	Central	Back
High	i		u
Mid		ə	
Low		a	

表 2: パイワン語の子音音素

	Labial	Alveolar	Palatal	Retroflex	Velar	Glottal
Stop	p b	t d		ɖ	k g	ʔ
Nasal	m	n			ŋ	
Fricative	v	s z				(h)
Affricate		ts				
Lateral		l	ɭ			
Trill		r				
Approximant	w		j			

子音に関して、声門摩擦音 /h/ は日本語からの借用語にしか現れない (Chang 2006: 21)。また、歯茎閉鎖音の /t//d/ の自由変異として [tʰ][dʰ] がある。この [tʰ][dʰ] はほかの方言、もしくは北パイワンの中でも地域によっては一つの音素として認める場合もある。また、個人差も大きくかわり、筆者のデータの大半を提供してくれた調査協力者はあまり [tʰ][dʰ] を用いなかった。

2.2 ヴォイス体系

パイワン語には「フィリピンタイプ」と呼ばれる体系とよく似たヴォイス体系がある (Li 2008: 528)。その直説法の体系を下の表に示す。ヴォイスは 4 つあり、それぞれ actor voice (AV), goal voice (GV), locative voice (LV), instrumental voice (IV) と呼ばれる。AV は動作主を主格にとり、GV は被動作主、LV は場所、源、部分的な影響を受けた物体など (Chang 2006: 74)、IV は道具などを主格にとる。

表 3: パイワン語の直説法におけるヴォイス体系

AV	GV	LV	IV
<əm>, mi-, m-,	-in/-ən	-an	si-
<ən>, φ			

[AV]

- (3) d<əm>ava~davats timadu i=kuin
 RED<AV>~walk 3SG.NOM LOC=park
 ‘彼は公園を散歩している’
- (4) maka timadu a m-aɫap tua vuluwa?
 can 3SG.NOM LIN AV-take OBL bow
 ‘彼は弓をとることができる’
- (5) nu ʔ<əm>udjal nutiaw, ini=ka uri mi-pəɫəpəɫ a hikuki
 IRR rain<AV> tomorrow NEG1=NEG2 will AV-fly NOM airplane
 ‘もし明日雨が降れば、飛行機は飛ばないだろう’
- (6) tʃəŋgəɫaj-φ=akən ta ŋiaw
 like-AV=1SG.NOM OBL cat
 ‘私は猫が好きだ’

表 3 に見たように AV は異形態を多く持つ。(3) の例にある接中辞 <əm> が最も基本の AV 形である。(4) のように語根が母音始まりの場合には m- を用いる。(5) の mi- は特定の語根とのみ共起する。(6) のように AV が φ であらわれる場合もある。

[GV]

- (7) dikup-in timadu na kisatsu
 arrest-GV 3SG.NOM GEN police
 ‘彼は警察に逮捕された’
- (8) anəma su=səŋsəŋg-ən?
 what 2SG.GEN=work-GV
 ‘あなたは何をしているの?’

GV は -in/-ən の二つの形態を持つが、これらは自由変異である。また、(7) では動作主である「警察」ではなく被動作主の「彼」が NOM の標識を受けている。

[LV]

(9) ku=vətsik-an aitsu a ʔadupu ta ku=ŋadan.
 1SG.GEN=write-LV this NOM paper OBL 1SG.GEN=name
 ‘I wrote this paper with my name.’ (C: Huang 2012: 123)

(10) ʔ<in>aɭap-an ti Zəpul ta za pajsu ni Lavakaw
 take<PFV>-LV PS.SG.NOM PN OBL that money PS.SG.GEN PN
 ‘Lavakaw took money from Zepul.’ (N: Chang 2006: 74)

(11) k<in>an-an ni Zəpul a za ʔavaj
 eat<PFV>-LV PS.SG.GEN PN NOM that rice.cake
 ‘Zepul ate of the rice cake.’ (There are some left.) (N: Chang 2006: 74)

(9) は、自分の名前を書く「場所」である「紙」が NOM の標識を用いてあらわされ、(10) はお金をとられる「源」である ‘Zəpul’、(11) は「部分的な影響」を受けた「餅」が NOM であらわされている。

[IV]

(12) s<in>i-təkəl ni Zəpul aitsu a kupu ta za zalum
 IV<PFV>-drink PS.SG.GEN PN this NOM cup OBL that water
 ‘Zepul drank that water with this cup.’ (N: Chang 2006: 72)

(13) si-patsun ta tilivi a migani
 IV-see OBL television NOM glasses
 ‘(私は) 眼鏡を使ってテレビを見る’

(12) は飲むために使う「コップ」が、(13) は見るために使う「眼鏡」が NOM であらわされている。

2.3 接頭辞について

パイワン語の接頭辞は AV 形において「接頭辞 -φ」と「接頭辞 +<əm>」という形が存在する。それぞれの例を (14) に示す。本稿で扱う ki- は「接頭辞 -φ」にあたる。例で示す接頭辞の意味は本論とあまり関わりがないので、本稿では詳しく触れない。また、ここで挙げた接頭辞はあくまでも一部であり、パイワン語に存在するすべての接頭辞の例を挙げているわけではない。

(14) 接頭辞の AV 系

[接頭辞-φ]

1. ki-

na ki-laŋda=kən ta lijaw na ʔajaʔajam s<əɱ>ena~senaj
 ?? KI-hear=1SG.NOM OBL sound GEN bird RED<AV>~sing
 ‘私は鳥のさえずりを聞いた’

2. pa-

pa-kan=akən ta icu a atsan
 CAUS-eat=1SG.NOM OBL this LIN pig
 ‘私は（家畜の）豚に餌をやる’

3. pu-

ti ʌavaus pu-hana~hana tutsu
 PS.SG.NOM PN put-RED-flower now
 ‘ラバウスは今花を飾っている’

例 1, 2, 3 を見ると、接頭辞 ki-, pa-, pu- はいずれも動作主を NOM にとり、これらが AV 形であることが分かる。しかし、表 3 でみたような接中辞 <əɱ>, <ən> や接頭辞 m-, mi- などとは共起せず、すべて AV = φ の形であらわれている。

[接頭辞 + <əɱ>]

4. k<əɱ>asi-

k<əɱ>asi-inu=sun?
 come.from-where=2SG.NOM
 ‘Where did you come from?’ (C: Huang 2012: 149)

5. s<əɱ>u-

na=s<əɱ>u-kava ti Kalalu
 PFV=remove-clothe PS.SG.NOM PN
 ‘Kalalu took off the clothes.’ (N: Chang 2006: 199)

例 4, 5 はそれぞれ接中辞 <əɱ> と共起した形で接頭辞が用いられる。

3. 先行研究

この節では ki- の通時的・共時的な先行研究を紹介する。

3.1 共時的な ki- の機能

3.1.1 パイワン語内部の共時的な ki- の機能

3.1.1 節では、小川・浅井 (1935)、Ferrell (1982)、Chang (2006)、Huang (2012) の主張する ki- の機能をまとめる。

3.1.1.1 小川・浅井 (S: 1935)

パイワン語の ki- についての機能を最初に記述したのは小川・浅井 (1935) である。彼らは ki- の機能について以下の 2 点を挙げている。

(15)小川・浅井 (1935: 133) の主張する ki- の機能

1. ʔi-² 「取る」

ʔi-vasa (<vasa ‘芋’) 「芋ほり」、ʔi-padai (<padai ‘米’) 「稲刈り」など

2. ʔi- 「自分」

ʔi-paiz (<paiz ‘扇ぐ’) 「自分を扇ぐ」、ʔi-siqas 「自殺」

小川・浅井 (1935) は語根の性質についての言及はなかったが、例に見るように ʔi- が「取る」の意味をとるとき語根は名詞であり、「自分」の意味をとるとき語根は動詞である。

3.1.1.2 Ferrell (C: 1982)

Ferrell は小川・浅井 (1935) よりも細かな分析をおこなっており、その機能は 5 つ記述されている。

(16) Ferrell (1982: 119-120) の主張する ki の機能

1. get, obtain (thing)

→ki-paisu ‘to get or seek money’ < paisu ‘money’

2. to do willingly/ for self

→ki-patsaj ‘to commit suicide’ < patsaj ‘die’

3. indefinite future

→ki=kən a vaik ‘I’ll leave’ < =kən ‘I’, vaik ‘go’

4. approximately, probably

→ki-ɖusa-idai ‘about two hundred’ < ɖusa ‘two’, taidai ‘hundred’

5. how it is; how is it?

→ki-tja-kuda-in? ‘what shall we do?’ < tja ‘we’, kuda ‘do what’, -in ‘GV’

このうち 3 に挙げられている ki は接頭辞ではない。4, 5 に挙げられている意味は Ferrell 独自の主張であり、筆者のデータにもこのような ki- の機能は存在しな

² 南パイワンの /ʔ/ は北パイワンでは /k/ である。

い。1, 2 は小川・浅井 (1935) と共通する意味である。Ferrell も語根の性質についての言及はないが、'get, obtain' の意味のとき語根は名詞であり、'for self' の意味のときの語根は動詞である。

3.1.1.3 Chang (N: 2006)

Chang は 4 つの ki- の機能を主張している。また、Chang は語根の性質についても言及している。

(17) Chang (2006: 126-127, 221) の主張する ki- の機能

1. ki- + 名詞語根で 'get, obtain' を示す

ki-paisu (< paisu 'money') 'earn money', ki-kasiw (< kasiw 'wood') 'chop or get wood'

2. ki- + 動詞語根で 'to do something by oneself, of one's own will, intentionally' を示す

ki-vali (< vali 'blow (wind)') 'get cool by exposing oneself to the wind'

3. ki- + 動詞語根で 'do something in the manner indicated by the verbal stem' を示す

ki-tsakaw (< tsakaw 'steal') 'do something stealthily'

4. ki- + 動詞語根で 'REFLEXIVE' を示す

ki-kəʎəm ti Zəpul

KI-hit PS.SG.NOM PN

'Zepul hit herself.'

1, 4 は今までの先行研究でも言われていた共通の機能である。Chang の 3 番目の例のように 'intention' を表わす例は Ferrell (1982) でも 'to do willingly' として記述されていた。

3.1.1.4 Huang (C: 2012)

Huang は ki- について 3 つの機能を認めている。

(18) Huang (2012: 186-189) の主張する ki- の機能

Ki-₁

a) 具体的・抽象的な物体をあらわす語幹について、'to get... ' の意味を表わす

→ki-ljacəŋ (< ljacəŋ 'vegetable') 'to get/buy vegetables'

b) 動作を表わす語幹について 'to get a gerundive state/action expressed by the base' を表わす

→ki-saʔətju (< saʔətju 'be painful') 'to doubt, be jealous of s.o./s.t.'

Ki-₂: 'REFLEXIVE'

→ki-ʔudjilj (< ʔudjidjilj 'red') 'to dye oneself red'

(b) の ki- の機能について Huang も ‘intention’ があることを認めている。また、先の 3 つの先行研究で見たように Huang も ‘get’ や ‘REFLEXIVE’ の機能を認めている。

3.1.1.5 小括

これまでに見た 4 つの先行研究すべてで共通していた「獲得」「再帰」の意味はパイワン語の ki- の意味の核であると考えられる。しかし、いずれの先行研究でも筆者の主張する「遊び」「依頼」の意味を持つとは述べられていなかった。

3.1.2 他の Formosan で見られる ki- の機能

3.1.2.1 Puyuma

プユマ語の先行研究は土田 (1980) と Teng (2008) を参照する。

土田 (1980: 261) はプユマ語の ki- の意味として「取る、集める」を挙げている。その他にも本稿で「再帰」や「遊び」と分類している ki- を用いている例も見られる。

(19) 土田 (1980)

[獲得] ki-vu/Raa/Rasi ‘さつまいも掘りをする’ (p.261)

[獲得] ki-sa-seruH ‘たけのこ掘りをする’ (p.261)

[遊び] ki-va/a/ngavang ‘ままごとする’ (p.250)

[遊び] m-aR-ki-vu/a/li-vuli ‘かくれんぼする’ (p.251)

[遊び] ki-m-aR-ayhi ‘じゃれて遊ぶ (動物と)’ (p.251)

[再帰] ki-a-veRay ‘もらう’ (p.251) cf. va-veRay ‘与える、やる、あげる’ (p.251)

[再帰] ki-a-vuras ‘借りる’ (p.252) cf. pa-a-vuras ‘貸す’ (p.252)

Teng (2008) は「獲得」のほかに「受身」や「行為の向きを変える」などの意味を認めている。

(20) Teng (2008: 182-186)

1. 名詞語幹について ‘to get or to obtain something’ をあらわす

ki-’aputr (<’aputr ‘flower’) ‘to pick flowers’, ki-tranguru (<tranguru ‘head’) ‘to behead’

2. 動詞語幹について ‘passive meaning’ をあらわす

ki-baluk (<baluk ‘wake’) ‘be woken up’, ki-tarama (<tarama ‘bully’) ‘be bullied’

3. giving/receiving を意味する動詞については行為の向きを変える

ki-beray (<beray ‘give’) ‘get; beg’, ki-tulrudr (<tulrudr ‘pass something to’) ‘catch’

3.1.2.2 Kavalan

Li & Tsuchida (2006: 278) には “qi- + N ‘to pluck; to pick up; to harvest’ cf. ki- + N in other Formosan languages” と記載されている。

(21) Li & Tsuchida (2006: 278)

- qi-tamun ‘to pick vegetables’ < tamun ‘vegetable’
- qi-btu ‘to pick up a stone’ < btu ‘stone’
- qi-zanum ‘to take water’ < zanum ‘water’

3.1.2.3 Thao

サオ語についての記述は Blust (2003) の辞書を参照する。サオ語において「獲得」の意味を表わす接頭辞は maki- と kin- の二種類ある。

(22) Blust (2003: 115): maki-

- maki-: a verb prefix attested with three bases
- maki-ara ‘harvest rice by hand’ < ara ‘fetch, take’
- maki-lhmir ‘to weed, pull weeds’ < lhmir ‘grass, weeds’
- maki-tuqa-tuqash ‘be old (people)’ < tuqash ‘old (people)’

Blust も既に述べているように、maki- の出現箇所は極めて限定的である。しかしいずれも語根の物体を自分のもとの ‘get/obtain/gather’ するという意味になる。それぞれ「(米を) 得る→収穫する」「雑草を得る→除草する」「年を得る→年をとる」となる。

maki- の出現が限定的な一方で ‘pick, gather’ の意味を持つ接頭辞 kin- は比較的生産的に見える。

(23) Blust (2003: 104) kin-

- kin-: a verb prefix meaning ‘to pick or gather X’
- kin-fatu ‘gather stones’ < fatu ‘stone’
- kin-lhuzush ‘pick plums’ < lhuzush ‘plum’
- kin-rusaw ‘catch fish; collect fish’ < rusaw ‘fish’

3.1.2.4 Bunun

ブヌン語は Nojima (2009) を参照する。ブヌン語では、makis-/pakis- という形態を用いる。

(24) Nojima (2009)

1. makis-saiv ‘ask for, request, beg’
2. makis-suhis ‘request for returning’
3. makis-dangaz ‘help to request’
4. makis-baas ‘request back’
5. makis-’unu ‘request next(??)’
6. makis-pusan/pakis-pusan-an ‘request two times’
7. makis-’amin/pakis-’amin-an ‘request all’
8. makis-laliva ‘request mistakenly’
9. makis-sasu/pakis-sasu-an ‘request immediately’

これらの例はすべて *ki-* ではなく *makis-/pakis-* という形式であること、また意味も「獲得」「再帰」などではなく ‘request’ であることから、本稿で扱う *ki-* とは一見関連の無い例のように見える。しかし、3.2.2.3 節で見たサオ語の例では *maki-* というブヌン語の *makis-* に類似した形式が「獲得」の意味を持っていた。また、Nojima (2009) はプユマ語の *ki-beray* (<*beray* ‘to give’) ‘to beg, ask for’ とブヌン語の *makis-saiv* ‘to beg’ の意味的・形態的類似を指摘している。フィリピン諸語の *maki-/paki-* との類似もその指摘の土台にある。

3.1.2.5 小括

周辺言語でも *ki-* は多くの場合「獲得」の意味を持つことが分かった。また、形態音韻的にはカヴァラン語では *qi-*、サオ語やブヌン語では *maki-* もしくは *makis-* という形になっていることが確認された。「獲得」以外の意味では土田 (1980) の例でみた「遊び」や、Nojima (2009) の例でみた「依頼」などの意味も持ち得ることが分かった。

次節は、通時的な先行研究を基に *maki-*, *makis-* と *ki-* の関連性を指摘する。

3.2 通時的な *ki-* の機能

3.2.1 Nojima (2009)

ブヌン語に見られる接頭辞 *makis-/pakis-* ‘to request, ask for’ と、いくつかのフィリピンの言語を基に、PAn で **makis-/pakis-* を再建している。Blust (2009, 2013) や Liao (2011) の再建とは異なり、Formosan の言語を比較対象に含めているため、後の二つとは再建形が異なり、再建形に *s* を認めている。この再建形に関して、Nojima (2009) では (a) PAn では **makis-/pakis-* と **maki-/paki-* という二つの異形態 (どのような環境下で交替するかは不明) があつた可能性、(b) PAn の **makis-/pakis-* の語末子音 /s/ がフィリピンの言語では脱落した可能性があることを指摘している。

また、3.1.2.1 節で見たようにプユマ語の *ki-beray* (<*beray* ‘to give’) ‘to beg, ask for’ とブヌン語の *makis-saiv* ‘to beg’ の *ki-*, *makis-* における意味的・形態的類似を指摘し、プユマ語の *ki-* と同形式のパイワン語やルカイ語の *ki-*、またカヴァラン語の *qi-* との関連も示唆している。しかし、共通の祖語にさかのぼるかどうかの決定的な証拠は未だないと述べ、これらの接頭辞間の関連を慎重に検討している。

3.2.2 Blust (2009, 2013)

Blust (2009: 364, 2013: 377) は再建形として **maki-/*paki-* ‘petitive (本稿では「依頼」)’ を再建した。しかし、Blust は Proto-Austronesian (PAn) もしくは Proto-Malayo Polynesian (PMP) など、どの時代の再建形であるかは明言していない。この反映形 (reflex) はフィリピン南部の言語や北ボルネオ、スラウェシ島で話されているフィリピンタイプの言語で確認されている (Blust 2013: 377)。

これらの意味が反映 (reflex) されている言語に Formosan は含まれないため、PAn での再建と主張するのは難しいだろう。

3.2.3 Zeitoun & Teng (2009)

Zeitoun & Teng (2009: 497) は他の再建形とは形式・意味ともに異なる **ki-* ‘get, obtain’ を PAn での再建形としてたてている。Zeitoun & Teng は Formosan で広く見られる [*ki-* + 名詞語根] が「獲得」の意味を持つという事実を基に再建を行っているので、この再建形が得られたものと考え。フィリピン諸語は彼女らの考察対象には含まれていなかった。

3.2.4 Liao (2011)

Liao は PMP で **maki-/*paki-* ‘social/comitative’ を再建した。理由としては、異なる下位分類に属する言語間にもこの意味は広がっていることや、動詞形だけでなく、名詞形にもこの意味があらわれていることを挙げている (pp. 223-224)。また、‘comitative, permissive’ からの意味変化についても記述してある。Stage 1 は ‘comitative, permissive’ の意味しか持たず、多くのフィリピンの言語がこのステージにある。Stage 2 では ‘comitative, permissive’ の意味も保ったまま、‘requestive’ and/or ‘polite imperative/polite request’ の意味が追加される。Stage 3 では ‘causative’ の意味が追加される。この場合 stage 2 で持っていた ‘requestive’ の意味は保持しているが、もともとの意味である ‘comitative’ の意味は失われている。Liao の調査で Stage 4 の言語は発見されなかったが、図に見るように ‘requestive’ の意味も失われ、‘causative’ の意味だけが残ることが予測できると述べられている (pp. 225-226)。

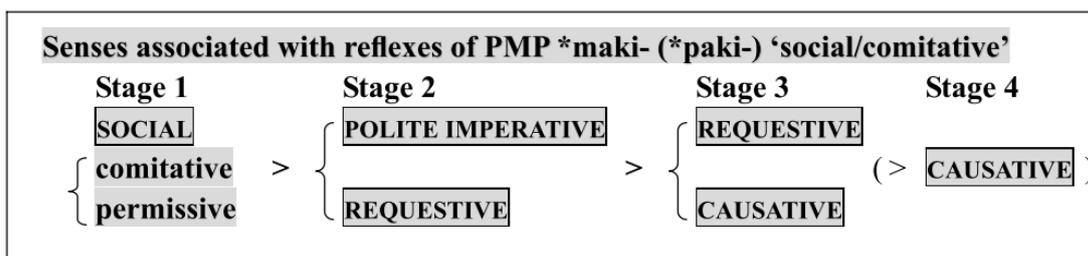


図 1: Liao (2011: 225) “PMP *maki- (*paki-) ‘social/comitative’: path of semantic change” より

3.2.5 小括

先行研究では「依頼」をあらわす接頭辞として *maki-/paki- もしくは *makis-/pakis- という形が建てられており、パイワン語の ki- はそれに由来するかもしれないことがわかった。これらの祖形とパイワン語の ki- との関係は音変化等の現象も考慮に入れながら慎重に検討していく必要があるが、4 節では筆者のデータを基に、パイワン語の ki- も「依頼」の意味を持つものがあることを示す。

4. 筆者のデータにある ki- の分析

筆者は ki- を「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」で分類した。既に何度か述べているように、この中で「獲得」「再帰」はパイワン語の ki- の核となる意味であると考えられる。「遊び」「依頼」の意味はパイワン語の先行研究では指摘がなかったが、周辺言語や通時的な先行研究を見ると、そのような意味を持つ可能性もあり、実際以下に示す筆者のデータにそのような意味を持つ ki- があることを指摘する。

以下の例文で、該当箇所の [ki- + 語根] は斜字にしてある。語根の意味に関しては Ferrell (1982) の辞書を参照した。中には語根の意味の記載がないものもあったが、複数の派生形から意味の抽出が可能なものについてはその意味を記す。

4.1 ki- 「獲得」

- (25) ku=*ki-lan̄da* a kai nimadu
 1SG.GEN=KI-hear NOM word 3SG.GEN
 ‘私は彼の話聞く’
 語根 *lan̄da* ‘to hear’ (C: Ferrell 1982: 38)
 [獲得 + 聞こえる = 聞く]

- (26) na *ki-lan̄da*=sun ta nima lijaw?
 ?? KI-hear=2SG.NOM OBL whose sound
 ‘あなたは誰の声を聞いたの?’

語根 *lanɔda* ‘to hear’ (C: Ferrell 1982: 38)

[獲得 + 聞こえる = 聞く]

(27) *ki-pa-kim*

KI-CAUS-search

‘追究する’

語根 *kim* ‘to search for’ (C: Ferrell 1982: 120)

cf. *pa-* ‘CAUSATIVE’

[獲得 + CAUS + 探し求める = 追究する]

(28) *ki-ta-kalava* *ti* *Aruwai* *i=tisyaba*
KI-??-await PS.SG.NOM PN LOC=station

‘アルアイは駅で待っている’

語根 *kalava* ‘await’ (C: Ferrell 1982: 112)

[獲得 + 待つ = 待つ]

(29) *ki-samula* *a* *ki-tulu* *tua* *icu* *a* *katsalisijan* *a* *kai*
KI-urgently LIN KI-teach OBL this LIN aboriginie LIN word

‘原住民の言葉の勉強を頑張る’

語根 *samula* (C: Ferrell 1982: 255)

[獲得 + 至急 = 頑張る]

→cf. (36) *ki-tulu*

4.1 節でまず注目すべきは (25) の例文である。2.3 節で述べたように、*ki-* は接頭辞の中でも [語根 + φ] で AV 形をつくるグループに属していた。(25) の *ki-* も、他の接辞がついていないため AV 形であると考えられるが、格標識が通常の場合と異なる。AV 節の場合動作主が NOM であらわされるが、(25) は動作主である「私」は GEN であらわされている。また、被動作主の「彼の話」が NOM であらわされているため、(25) は典型的な Non-agent voice (NAV) 節といえる。しかしこのような特殊な例文はこの一例しかなく、議論のためのデータが足りないため、本稿ではこの例文の特殊性を指摘するにとどめる。

(29) の例では語根 *samula* の見出しに意味の記載はないが、派生形 *ki-samula* ‘to do something with zeal, urgently’ や *pa-samula* ‘to work urgently’ を基に、語根 *samula* は ‘urgently’ の意味を持つことが推測できる。

4.2 ki-「再帰」

- (30) na ma-kasi-zua timadu tanuakən *ki-sədjəm*
 ?? MA-to.be.from-that(?) 3SG.NOM 1SG.OBL KI-something.borrowed
 ta ita ausua

OBL one umbrella

‘彼は私から傘を借りた’

語根 *sədjəm* ‘something borrowed’ (C: Ferrell 1982: 260)

→cf. *pa-sədjəm* ‘貸す’

[再帰 + 借りる = 借りる]

- (31) *ki-pavalit=sun* ta kava
 KI-change=2SG.NOM OBL clothe

‘あなたは服を着替える’

語根 *pavalit* ‘change’

→cf. *ma-pavalit* ‘変わる’

[再帰 + 変わる/変える = 変える]

- (32) *vaik=akən* a ma-biuin a *ki-pu-tsəməl*
 go.AV=1SG.NOM LIN go.to-hospital LIN KI-have-medicine

‘私は病気を治すために病院に行く’

語根 *pu-tsəməl* ‘to treat with medicine; doctor’ (C: Ferrell 1982: 313)

cf. *pu-* ‘to have or produce; acquire’ (C: Ferrell 1982: 202)

[再帰 + 薬で治療する = 病気を治す]

- (33) *ki-patsun* taimadu ti Saunijaw
 KI-CAUS?-?? 3SG.OBL PS.SG.NOM PN

‘サウニヤウは彼に見られる’

語根 *patsun* ‘see’

[再帰 + CAUS? + 見る = 見られる]

- (34) *ayatua* ma-tsula=kən saka uri *ki-vətu=akən*
 because STAT-hungry=1SG.NOM and will KI-full=1SG.NOM

‘私はおなかがすいているので、食べる必要がある’

語根 *vətu* ‘full’

→cf. *ma-vətu* ‘満腹である’, *v<ən>ətu* ‘(嫌になるほど) 食べさせる’

[再帰 + full = lit. 私は私をお腹いっぱいにする]

- (35) paramu=anja *ki-tsəpəliw*=sun ma-dipun
 soon=COS KI-return=2SG.NOM go.to-Japan
 ‘もうすぐあなたは日本に帰る’
 語根 *tsəpəliw* (C: Ferrell 1982: 314)
 [再帰 + 戻る = 帰る]

- (36) *ki-samula* a *ki-tulu* tua icu a *katsalisijan* a *kai*
 KI-urgently LIN KI-teach OBL this LIN aborigine LIN word
 ‘原住民の言葉の勉強を頑張る’
 →cf. (29) *ki-samula*

(30)(31) の例で特に顕著であるが、パイワン語の *ki-* は「再帰」というよりも、「動詞語基が「動作主から離れていく方向」をあらわしている場合、その動詞語基について「動作主に向かう方向」をあらわす拡張語幹を派生する」と記述したほうが事実在即している。例えば (31) では語根 ‘*valit*’ に接頭辞 *ma-* が付いた場合は *ma-valit* 「変わる」という意味になり、*ki-* が付いた場合は *ki-valit* 「変える」というふうに、*ki-* がつくことで動作の方向を変えている。

(35) に関して、語根 *tsəpəliw* は辞書の見出しに意味の表記がないが、派生形を調べることで、おおよその意味の抽出は可能である。Ferrell (C: Ferrell 1982: 314) は *tsəpəliw* の項に *ki-tsepeliw* ‘to (go and) return’ や *ts/m/epeliw* ‘to move something then replace in original position’ などの派生形を提示していた。これらの例から語根 *tsəpəliw* の意味は ‘return’ であることが推測できる。

(36) の語根 *tulu* も見出しに意味の記載はないが、派生形 *t<əm>ulu* 「教える」や *pa-tulu* 「教える」などから *tulu* の意味は「教える」だと推測できる。また、この例も「教える（動作主から離れていく方向）」に *ki-* を用いることで「勉強する（動作主に向かう方向）」という風に変えている。

4.3 *ki-* 「遊び」

- (37) *ʔ<əm>udja~ʔudjaʔ* i=sasaw saka *ki-vaŋavaŋ*=akən i=tjumaʔ
 RED<AV>~rain LOC-outside and KI-play=1SG.NOM LOC=home
 ‘外は雨が降っているので、家の中で遊んだ’
 語根 *vaŋavaŋ* ‘to play, amuse oneself’ (C: Ferrell 1982: 337)
 [遊び + 楽しませる = 遊ぶ]

- (38) *aitsu* a mali *si-ki-vaŋavaŋ* ni kaka
 this LIN ball IV-KI-play 3SG.GEN sister

‘妹がこのボールで遊んでいる’

Lit: このボールは妹が遊ぶためのものだ

語根 *vaɣavaŋ* ‘to play, amuse oneself’ (C: Ferrell 1982: 337)

[遊び + 楽しませる = 遊ぶ]

- (39) *ki-kəlu-in ti Saunijaw ma-kasi-nikai*
 KI-fall-GV PS.SG.NOM PN MA-come.from-second.floor

‘サウニヤウが二階から飛び降りる’

語根 *kəlu* ‘to fall (as fruit)’ (C: Ferrell 1982: 116)

[遊び + 落ちる = 飛び降りる]

- (40) *ki-tukutuku=akən a vaik a ki-vala*
 KI-bicycle=1SG.NOM LIN go.AV LIN KI-be.able.to.do

‘私は自転車に乗って旅行に行く’

語根 *vala* ‘be able to do’ (C: Ferrell 1982: 334)

[遊び + 可能 = 旅行する]

→cf. (41) *ki-tukutuku*

- (41) *ki-tukutuku=akən a vaik a ki-vala*
 KI-bicycle=1SG.NOM LIN go.AV LIN KI-be.able.to.do

‘私は自転車に乗って旅行に行く’

語根 *tjuku-tjuku* ‘a wheel; automobile; bicycle’ (C: Ferrell 1982: 301)

[遊び + 自転車 = 自転車に乗る]

→cf. (40) *ki-vala*

- (42) *ki-ruʔu~ruʔu azua vatu i=ta tsəmətsəməl*
 KI-RED~roll that dog LOC=OBL grass

‘犬が草の上を転がる’

語根 *ruʔu* (C: Ferrell 1982: 249)

[遊び + 転がる = 転がる]

(39) は「ハングライダー、パラグライダー、バンジージャンプなどに関しても *ki-kəlu* を用いる」との調査協力者の発言から、遊びの意味合いが強いことが分かる。

(40)(41) は同じ例文だが、(40) は *ki-vala* に (41) は *ki-tukutuku* に焦点をあてている。同じ乗り物でも車や飛行機に乗るときは接頭辞 *tjə-* を用い、自転車に乗るときのみ *ki-* を用いる。

ki-liva-livak ‘(W) loving one another’ などから livak の意味は ‘love’ であると推測できる。

また (43)(44) の筆者のデータに見るように、パイワン語でも ki- を「依頼」の意味を持つと認めると、これらの例において自然な説明が可能になる。

4.5 更なる調査を必要とする ki-

この節では、語根の意味の抽出が不可能だったもの、また語根の意味が分かっても派生の過程が解釈不可能なもの例をまとめている。

- (47) *ki-ʔauŋ=akən* *tanusunʔ*
 KI-weep=1SG.NOM 2SG.OBL
 ‘何かお手伝いすることがありますか?’
 語根 *ʔauŋ* ‘to weep’ (C: Ferrell 1982: 218)
 → cf. *ki-ʔauŋ* ‘make request’ (C: Ferrell 1982: 218)

ʔauŋ という語根の意味は分かっているにもかかわらず ‘weep’ から「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」のどの意味の ki- を用いても ‘make request’ の意味を派生することは難しいように思える。ki-*ʔauŋ* 自体が慣用句的な用法をもつことも考えられ、追加調査が必要な語の一つである。

- (48) *puli ki-unəŋ=akən* *lakua uri* *pu-saʎsaʎadj-an=akən*
 want KI-ʔ?=1SG.NOM but will PU-help-AN=1SG.NOM
ta *ku=kina*
 OBL 1SG.GEN=mother
 ‘私は遊びに行きたいけど母の手伝いをしなければならない’
 語根 *unəŋ* (C: Ferrell 1982: 328)

unəŋ に関しては、語根の見出しに意味の記載がない。また、他の派生形の例示が Ferrell (1982: 328) にも筆者のデータにも存在しないため、意味の抽出も困難である。ki-*unəŋ* 自体の意味は「遊びに行く」になるため、この ki- は「遊び」の意味を持つ可能性が高いが、*unəŋ* に他の派生形が存在するのかなど追加調査が必要である。

- (49) *ki-vadaʔ=akən*
 KI-ʔ?=1SG.NOM

方言。「西パイワン」という表現は Ferrell しか用いておらず、どの地域を指しているのかは正確には不明である。

‘(私は)(あなたに)質問があります’

語根 vada? (C: Ferrell 1982: 331)

vada? も語根の見出しに意味の記載がなく、他の派生形もデータにないため、意味の抽出が困難な例の一つである。また、直前の ki-unaj とは異なり、ki-vada? 自体を「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」のいずれかに分類することも難しい。

(50) ki-liŋav-u!⁴

KI-??-IMP

‘試してみてください!’

語根 liŋaw (Ferrell 1982: 163)

語根 liŋaw は Ferrell (1982: 163) の辞書に同音異義語として 3 種類挙げられている。

liŋaw₁ ‘to have need to urinate or defecate’

→liŋav-akən ‘I wish to relieve myself’

liŋaw₂ ‘echo’

→l<əm>iŋaw ‘to make much noise’

liŋaw₃

→liŋa-liŋaw ‘(W) soul, body’

pu-liŋa-liŋaw ‘(W) to know profoundly’

ki-liŋaw ‘(W) to test, examine, taste’

pu-liŋaw ‘priestess, shaman’

3 番目の liŋaw は見出しに意味の記載がないが、ki-liŋaw の例はここに含まれる。派生の例はたくさんあるものの、派生語間に共通の部分が乏しく、語根の意味を抽出することは難しい。また ki-liŋaw 自体の意味も「獲得」「再帰」「遊ぶ」「依頼」のいずれかに分類することは不可能である。

5. まとめ

まず、2.3 節で接頭辞 ki- の特徴として「接頭辞 -φ」で AV 形をつくることを述べた。続いて 3 節で見た様々な先行研究から、共時的なパイワン語の ki- はまず「獲得」「再帰」の意味を持つことが分かった。本稿ではこれに加えて、「遊び」「依頼」の意味を派生する機能が ki- にあることを示した。この二つは先行研究にはな

⁴ /w/ は語頭・語中で [v] になり語末で [w] になる

いものである。また筆者のデータから明らかになった「依頼」の意味をもつ ki- の発見はパイワン語の ki- も祖形 *maki-/paki- もしくは *makis-/pakis- にさかのぼる可能性を示した。

略号一覧

1: 1 st person	2: 2 nd person	3 rd person
AV: actor voice	CAUS: causative	COMP: complementizer
COS: change of state	GEN: genitive	GV: goal voice
IMP: imperative	IRR: irrealis	IV: instrumental voice
LIN: linker	LOC: locative	LV: locative voice
NEG1: negator1	NEG2: negator2	NOM: nominative
OBL: oblique	PEV: perfective	PN: person name
PS: person	RED: reduplication	REF: reflexive
REQ: request	SG: singular	
∴: morpheme break	∴: clitic break	◁▷: infix

参考文献

- Blust, R. (2003). *Thao Dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Blust, R. (2009). *The Austronesian Languages*. Pacific Linguistics 602. Canberra: The Australian National University.
- Blust, R. (2013). *The Austronesian Languages* (Revised ed). Canberra: Asia-Pacific Linguistics, Research school of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Chang, A. H. (2006). *A reference grammar of Paiwan*. Australian National University.
- Ferrell, R. (1982). *Paiwan Dictionary*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Huang, W. (2012). *A study of verbal morphology in Puljetji Paiwan*. National Tsing Hua University.
- Li, P. J. (2008). The great diversity of Formosan languages. *Language and Linguistics*, 9(3), 523–546.
- Li, P. J., & Tsuchida, S. (2006). *Kavalan Dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Liao, H. C. (2011). On the development of comitative verbs in Philippine languages. *Language and Linguistics*, 12(1), 205–237.
- Nojima, M. (2009). Bunun prefix makis-/pakis- "to request, ask for": an evidence for PAN *makiS-/pakiS-. In *11th International Conference on Austronesian*

Linguistics (pp. 1–5). Aussois, France.

Teng, S. F. (2008). *A reference grammar of Puyuma, an Austronesian language of Taiwan*. Canberra: Pacific Linguistics Research School of Pacific and Asian Studies The Australian National University.

Zeitoun, E., & Teng, S. F. (2009) From ki-N “get N” in Fromsan languages to ki-V “get V-ed” (passive) in Rukai, Paiwan and Puyuma. In E. Bethwyn (Ed.), *Discovering history through language: papers in honour of Malcolm Ross* (pp. 479–500). Canberra: Pacific Linguistics.

小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による臺灣高砂族傳説集』 東京: 刀江書院.
原住民族委員会 (n.d.) 『55個原郷列表』 (2019 年 4 月 12 日閲覧)

<https://www.apc.gov.tw/portal/index.html>

土田滋 (1980) 「プユマ語 (タマラカオ方言) 語彙一付・語法概説およびテキスト」 『黒潮の民族・文化・言語』 pp. 183–307. 角川書店.

受理日 2019 年 4 月 16 日